

禅宗寺院における舍利信仰と空間認識

堀 邊 阿伊子*

The Faith of Śarira and the Space Perception in the Zen Buddhism Temple

Aiko HORIBE*

1. はじめに

宗教とは、開祖・教義・教団等の要素によって成立しているが、どのような宗教も一定の空間に、聖地・寺院・教会等を占有し、それによって伝統を形成していく。本論は禅宗寺院を例にとり宗教と宗教行為（儀礼・修行・巡礼等）がなされる空間との関わり合いを考察するものである。

考察対象は、鎌倉期に成立した禅宗寺院である巨福山建長寺と瑞鹿山円覚寺とする。この2つの寺院を取り上げる理由として、①両寺院の成立がほぼ同時期である、②北鎌倉の谷戸といわれる谷間に北東の山並みを背にして境内が広がっている、という時間的にも空間的にも類似した条件を有しているためである。両寺院を比較考察することにより、寺院に関わる人々がその空間に対してどのような認識をもっていたのか、またその認識が寺院の空間構造にどのように反映されていたのかを探っていきたい。

2. 従来の宗教空間に関する研究

これまで宗教空間の問題を研究する分野としては、宗教地理学という研究領域がある。松井圭介氏は宗教地理学について「宗教と環境（自然環境および社会環境を含む総体として）との関わりを問う学問」であると定義し、さらに宗

教と環境との関わり方から宗教地理学を三つの視点に分類している⁽¹⁾。

① 「環境から宗教へ」という視点

環境が宗教に与える影響についての研究。宗教は環境の一部に過ぎず、環境が宗教を規定するという考え方。

② 「宗教から環境へ」という視点

環境や景観における宗教の能動的役割を強調し、文化景観に影響を与える上部構造として宗教を捉えようとする考え方。

③ 「環境と宗教」両者からの視点

環境と宗教との相互関係を見出そうとする考え方。

なお、宗教現象の理解において宗教地理学は本質的な要素ではないと考えられているため宗教学における宗教地理学の位置は相対的に低いという現状をふまえ、松井氏は宗教という人間の根源的な体験と空間構造との関連を解明していく課題を担っている重要性を指摘している⁽²⁾。

さて、以上のような松井氏の宗教地理学の三分類と宗教地理学の位置づけに関する問題は、宗教と空間を考える上で基本的な研究の枠組みを提示したものであり、本論においても常に意識していかなければならない視点といえる。

*人文学部 空間造形学科

3. 考察方法

建長寺及び円覚寺をはじめとする臨済宗本山クラスの寺院には、その空間を構成する要素として塔頭という堂宇がある。本論では、両寺院における塔頭の配置と禅宗における舍利信仰という視点から、その時代の僧侶の空間認識を考察する。

塔頭とは元来高僧の墓所のことで、高僧の死後その弟子達が墓周辺に庵を建てて奉仕することにより形成されたものである。玉村竹二氏に

よれば、日本禅宗において塔頭は、公的なものから一門派の拠点へと変化していきその門派の象徴的施設となっていく。そしてその発展と共にそれぞれの門派は分裂し、やがては建長寺と円覚寺のように放火を引き起こす程の対立へと発展していった⁽³⁾。

両寺の塔頭配置を考察するにあたって「円覚寺境内図」(図1)・都市計画基本図(円覚寺)(図2)・「建長寺境内図」(図3)・等の資料を使用した。「建長寺境内図」は1678年に、火災

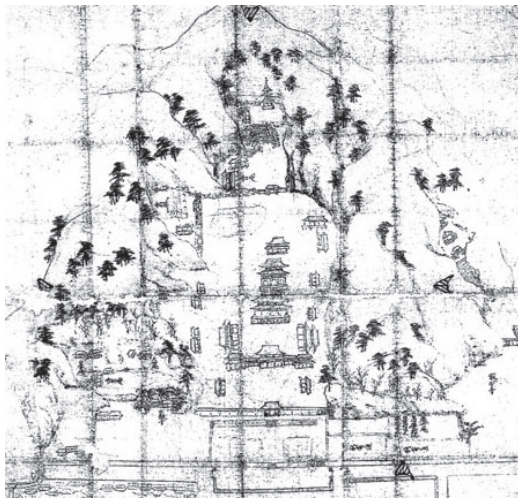


図1. 円覚寺境内図 1331~41年



図2. 都市計画基本図(円覚寺)平成10年測量
(塔頭(仏光派とその他)を記号で配置した)

◎仏光派塔頭(円覚寺開山門派)

△その他塔頭



図3. 建長寺境内図 1678年

(塔頭(大覚派・仏光派のみ)を記号で配置した)

★大覚派塔頭(建長寺開山門派) ◎仏光派塔頭

後の復興のために描かれたもので、49院にのぼる塔頭の場所が記されている。近年の発掘調査からもその信頼性がうかがえる⁽⁴⁾。

一方円覚寺の場合、多くの塔頭が存在していた最盛期の絵図はない。しかし、「円覚寺境内図」(1331～41年)・『新編鎌倉志』の円覚寺境内図(1685年)・現在の都市計画基本図の3点において描かれている塔頭の場所を比較すると大きな変化は見られない。以上の平面的資料を用いて時代背景と照らし合わせ、検討を試してみる。

4—① 円覚寺における塔頭の配置

塔頭が増加していく経緯と「円覚寺境内図」とを照らし合わせてみると、開山塔正統院が1335年に建長寺より移築される以前の5つの塔頭は、中心部より左右の裾に位置している。その後正統院が移築されると、夢窓疎石の黄梅院等、次々と円覚寺境内の奥部分から塔頭が成立していく。また門派別に分析してみると奥部分の塔頭は開山無学祖元の門派である仏光派のものが多い。

高橋陸氏によると「谷戸の最深部は華嚴塔が建っていた聖地であるため、円覚寺史において重要人物に対しては、第一に聖地である奥の空間が創建場所として選ばれた」としている⁽⁵⁾。華嚴塔の塔心には宋より招来した仏舎利三粒と袈裟をおさめていたとされていることなどから、塔及びその場所が聖地とされていたことは確かであろう。しかし、最深部を重要人物の塔頭を建てる場所として認識した理由は他にも考えられる。ここで言われている重要人物とは、主に無学祖元、夢窓礎石、北条時宗(円覚寺開基)のことである。塔頭の意味合いが変わり、門派間の対立意識が芽生えていく中、夢窓疎石の塔頭は聖地としての認識以上に、主流門派に対してその存在感を示すために華嚴塔のある最深部を選んだと考えられる。その後、奥の領域に仏

光派の塔頭が多く成立していく。

4—② 建長寺における塔頭の配置

「建長寺境内図」によると、最重要人物である開山蘭溪道隆の塔頭西来庵をはじめ、初期にできた大覚派の塔頭は境内中部、仏殿から向かって右手に位置している。建長寺の境内地は地獄谷と呼ばれた犯罪人の処刑場であった。絵図にも奥部分に地獄や地蔵にちなむ名が記されており、そこには死や地獄のイメージがあったと思われる。最深部より手前の領域には、仏殿近くの塔頭と比べても成立年代に大きな差はないと思われる塔頭も多く成立していることから、塔頭の成立場所は時間の経過と共に奥へ移っていったようである。つまり当初から最深部以外の場所には地獄や死のイメージはなかったと考えられる。それにも関わらず西来庵は境内中間の領域に位置していることをふまえると、建長寺においては少なくとも谷戸の奥が聖地であるという認識はされていなかったと言える。

塔頭が増加していく経緯と絵図とを照らし合わせてみると、開山蘭溪道隆の門派である大覚派の塔頭は、開山塔頭西来庵周辺を中心部から成立していったようである。一方、仏光派・夢窓派の塔頭は境内中心部からは離れた位置にある。玉村氏によると、対立する程ではないにせよ、当初から両派の間には隔たりがあったとしている。そうした認識が塔頭の所在を決定する際の要因になったと推察される。そして塔頭の意味合いが門派の象徴へと変化した後はさらにその傾向は強くなる。

4—③ 両寺院の比較考察

以上をふまえて建長寺と円覚寺の塔頭の配置を比較し考察すると両寺の共通点として以下の点があげられる。

①同門派の塔頭が集合して配置されている。

②開山の門派の塔頭は開山塔周辺に集中している。

このような点から、塔頭の性質が公的なものから門派の拠点へと変化し、その門派の象徴に対する僧侶の認識が塔頭の配置に反映されたと推察できる。

5. 開山塔の場所の選定と禅宗の舍利信仰

以上のように建長寺と円覚寺の塔頭の所在について考察したが、重要な位置を占める開山塔の場所の選定について考察していく。

円覚寺の場合、夢窓疎石が建長寺から無学祖元の塔頭正統院を移築している。玉村氏によると、無学祖元は建長寺にとっても傑出した名僧であり塔頭まで造営した重要人物である。その人の塔院を円覚寺に移すには、並大抵のことで建長寺を納得させられない。そのため夢窓は後醍醐天皇の勅令を背景とし、また移築する場所も、わざわざ仏教徒としては最も敬うべき仏舎利のある場所を選び移築の理由付けとしたという⁽⁶⁾。

これに対して建長寺の場合、西来庵の成立に関しては不明であるが、示寂後間もなく造られたと考えられている。『元亨釈書』に、以下の記述がある。

闇維得五色舍利。其煙觸樹葉。累然皆綴舍利。門人自遠方至者歷數十日。到葬所搜索林木。多得舍利。

(蘭溪道隆の示寂後、茶毘に付したところ五色の舍利を得た。その煙の触れるところの樹葉が舍利を綴った。門人、遠方より自ら至る者数十日を数えて葬所へ到り、林木をさわり、多くの舍利を得た。)

開山塔に隣接する白楨の木(図4)が「舍利樹」と呼ばれていることがこの因縁によるものであるならば、建長寺開山塔の建っている場所は開山を茶毘に付して五色の舍利を得た場所と一致



図4. 西来庵に隣接する白楨の木

していると推察できる。この『元亨釈書』の記述は開山塔の建つ以前のその場所に関する貴重な記述であるといえよう。

このように建長寺・円覚寺それぞれの開山塔の建つ以前の場所を考察すると、両寺の共通点として「舍利」の存在があげられる。しかし円覚寺は「仏舎利」であり、建長寺は「高僧舎利」である。禅宗ならびにその時代にとって舍利はいったいどういう意味を持つのであろうか。またその中で仏舎利・高僧舎利とはどういう位置付けにあったのかをふまえて再考察する。

6. 禅宗における舍利信仰

禅宗における舍利信仰については西脇常記氏の考察がある⁽⁷⁾。西脇氏によれば中国で仏舎利についての記述が見られるのは『梁高僧伝』に見られる182~252年の話である。舍利に関する記述の共通項として舍利が堅固で光り輝く神秘性があり、それらは舎利の靈験の高さの証であり、そして舍利は至誠によって感得されると考えられていた。唐の時代まで舍利は仏教の始祖である釈迦の遺骨であるが故に信仰の対象になっていた。その信仰とは仏陀によってもたらされる功德を期待するという受動的な礼拝によって成立していた。しかし唐末になり中国の僧の間にも火葬が普及し始め高僧の舍利という存在が現れる。しかしその時代、舎利の神秘性

は未だ注目されていない。そのことから、高僧の舍利が仏舍利と同じ様に注目されるには火葬の普及以外にも条件が必要であったとし、それは従来の仏教とは異なった新しい仏教によって育まれた意識である、と西脇氏は考察している。

ここで西脇氏は、新しい仏教とは、今までの受動的な信仰ではなく、個人の自覚的な仏教、特に禅だと指摘している。やがて舍利の数や神秘性が個人の悟境の深淺を示すバロメーターであるという認識が生まれ、「高僧舍利」が「仏舍利」と同様に信仰されるに至る背景には心の内面を重視する禅の流行があったという。

以上西脇氏の論考によって、ここまで中国における舍利信仰の始まりと高僧舍利への信仰が生じる過程を辿ったが、このように中国において発展した舍利信仰は来朝した中国僧や入唐・入宋した僧によって日本においても広まっていったのである。

例えば道元禪師が明全の舍利について記録した『舍利相伝記』には、闇維した際の色が五色であったこと、白い舍利三顆を得たこと、といった記述があり、中国における舍利の記述の特徴をもっている。舍利や仏像への信仰に対して総じて否定的な道元禪師にも高僧舍利に対して完全に否定しはていないといえる。しかしそこにはあくまで受動的ではない、能動的な仏教観があってのことであり、そこに禅宗と高僧舍利との深い関わりが見てとれる。

以上のことをふまえてもう一度、円覚寺・建長寺と舍利とのつながりについて考察してみたい。

7. 両寺院と舍利との関係性

円覚寺の場合、玉村氏の論考⁽⁸⁾をもとに整理すると、大休正念が舍利会のために上堂していたことなどから仏舍利が重要視されていたことがうかがえ、正統院を円覚寺へ移す際に舍利殿

が建長寺を納得させ得る理由となった背景が見える。さらに後の話ではあるが、円覚寺には応仁の乱の頃より伝説があり、それは円覚寺から京都へ召し上げられて一度はなくなってしまった仏牙舍利が後に天から降ってきたというものである。仏舍利が自ら帰ってきたことにより舍利殿が復活するというのである。

以上のことから円覚寺にとっての仏舍利に対する信仰がうかがえる。

次に建長寺であるが、蘭溪道隆およびその門弟、建長寺の初期の住持には来朝僧が多い。また入宋している僧もいることから高僧舍利に対する信仰は比較的強かったのではないかと推測出来る。

茶毘に付したその様相も、五色の舍利が出て、その煙の触れるところの樹葉が舍利を綴る、といった神秘的なものであり、その数に関しても具体的な数字ではないが、多くを得たり、としている。西脇氏によれば、このような茶毘に付した際の現象と舍利数はその僧侶の悟境の深淺を示すバロメーターであるので、この『元亨釈書』の記述は、いかに蘭溪道隆の悟境が深く、その生涯が素晴らしいものであったかを示していると言える。

このように、建長寺開山である蘭溪道隆の悟境の深さを示す現象に縁のある柏楨を「舍利樹」と呼び神聖視するに至るのは自然なことであるといえよう。さらにその場所をも神聖な場所として認識していたと考えられる。

以上のことから開山塔を建てるにあたり、一番適しているのは蘭溪道隆の覚悟の深さを表した舍利の出現した聖域が選ばれたと考えられる。

そこで両寺の舍利信仰について比較検討してみたい。

円覚寺の場合は「仏牙舍利」であり、その場所に無学祖元の正統院が移される背景として、建長寺を納得させるために神聖な仏舍利のある

場所が選ばれた、という政治的なものがある。しかし逆に言えば、正統院を円覚寺に移されることは建長寺にとって相当な屈辱であるにもかかわらず、その建長寺を納得させるだけの力が仏舎利にはあったということになり、そこから鎌倉時代の仏舎利の影響力がうかがえる。

建長寺では「高僧舎利」であるが、それは僧侶の禪的境地の深さを表すものであったため、禅宗においては「高僧舎利」も「仏舎利」同様に信仰を集めるものであった。

両寺ともに、「舎利」のある場所、縁のある場所が聖域として認識され、開山塔の建つ場所としてふさわしいという意識があったと考えられる。そして後にその場所に建てられた開山塔を中心に開山門派の塔頭が広がっていくことになる。

8. おわりに

本論では建長寺と円覚寺の塔頭の配置から、宗教と空間との関わりを探った。その結果、以下のようにその宗教の持つ信仰形態と空間が相互に作用しながらひとつの宗教空間を形成していく経緯がみられた。(図5)

- ① 舎利信仰→開山塔
(その宗教の持つ信仰形態によって聖域が生じる。)
- ② 開山塔→門派抗争
(聖域を軸として宗教的人間関係が生じる。)
- ③ 門派抗争→塔頭
(その宗教的人間関係に伴い聖域が拡大していく。)

松井氏の指摘どおり宗教学の立場から宗教空間に対しての考察がなされることは少ない。また、空間的立場から宗教空間が考察されることはあるが、そこに宗教学的視点による考察を取り入れることは困難な場合が多い。しかしながら両者が相互に作用している可能性がある以上、

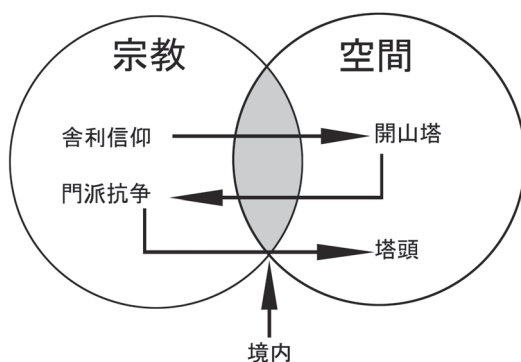


図5. 相互関係図

空間を把握する上でも、宗教を把握する上でも、双方の視点で宗教空間を考察することは有意義であるといえる。

注

- (1) 松井圭介『日本の宗教空間』(古今書院) 2003年、4-7頁。
- (2) 松井、前掲書、9頁。
- (3) 玉村竹二「五山叢林の塔頭に就いて」『叢書禅と日本文化第五巻』(ぺりかん社) 2002年、138-139頁。144項。
- (4) 建長寺境内発掘調査団『巨福山建長境内遺跡』、138、139頁。
- (5) 高橋陸、石川幹子「円覚寺に見る古都鎌倉における宗教的谷戸空間の景観構造に関する研究」『ランドスケープ研究』67号(日本造園協会) 2004年、661頁。
- (6) 玉村竹二「文献上より見たる円覚寺舎利殿」『国宝円覚寺舎利殿』(神奈川県教育委員会文化財保護課) 1970年、6頁。
- (7) 西脇常記「舎利信仰と僧伝におけるその叙述」『禅文化研究所紀要』第十六号(禅文化研究所) 1990年、195-13頁。
- (8) 玉村、前掲論文、「文献上より見たる円覚寺舎利殿」、7、25頁。

参考文献

- ・ 太田博太郎『中世の建築』（彰國社）1957年
- ・ 鎌倉市史編纂委員会『鎌倉市史 寺社編』（吉川弘文館）1958年
- ・ 鎌倉国宝館編『鎌倉の古絵図 一』（鎌倉市教育委員会）1968年
- ・ 建長寺境内発掘調査団『巨福山建長寺境内遺跡』（建長寺境内発掘調査団）1991年
- ・ 虚関師鍊『元亨釈書』『大日本仏教全書』第101巻（名著普及会）1979年
- ・ 国立歴史民族博物館編『神と仏のいる風景』（山川出版）2003年
- ・ 駒沢大学同辞典編纂所編『禅学大辞典』（大修館）1978年
- ・ 五味文彦「鎌倉の景観と文化—鎌倉への視座1」『文献と史蹟』一号（東京大学人文社会系研究部）2003年
- ・ 玉村竹二「五山叢林の塔頭に就いて」『叢書 禅と日本文化第五巻』（ぺりかん社）2002年
- ・ 玉村竹二「建長寺と円覚寺の異同」『日本禅宗史論集下之二』（思文閣出版）
- ・ 玉村竹二、井上禅定『円覚寺史』（春秋社）1964年
- ・ 玉村竹二「文献上より見たる円覚寺舍利殿」『日本禅宗史論集上』（思文閣出版）1988年
- ・ 玉村竹二『臨濟宗史』（春秋社）1991年
- ・ 玉村竹二『五山禅僧伝記集成 新装版』（思文閣出版）2003年
- ・ 高橋陸、石川幹子「円覚寺に見る古都鎌倉における宗教的谷戸空間の景観構造に関する研究」『ランドスケープ研究』67号（日本造園協会）2004年
- ・ 鶴見大学建長寺境内発掘調査団『史蹟建長寺』（鶴見大学建長寺境内発掘調査団）2003年
- ・ 東京国立博物館『鎌倉 禅の源流』（日本経済新聞社）2003年
- ・ 西脇常記「舍利信仰と僧伝におけるその叙述」『禅文化研究所紀要』第16号（禅文化研究所）1990年
- ・ 松尾剛次『日本中世の禅と律』（吉川弘文館）2003年
- ・ 松井圭介『日本の宗教空間』（古今書院）2003年
- ・ M・シュヴィント編著『宗教の空間構造』（大明堂）1978年
- ・ 三浦勝男編『鎌倉志料一』（鎌倉市教育委員会）1991年
- ・ 山田泰弘『瑞鹿山円覚寺』（大本山円覚寺）1985年